

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 17 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370689

研究課題名(和文) 英語関係節・補文節の認知類型論的応用研究：日本人大学生の作文データの分析を通じて

研究課題名(英文) Cognitive Typological Study on Acquisition of Relative and Complement Clauses in English: Based on Composition Data by Japanese University Students

研究代表者

守屋 哲治 (Moriya, Tetsuharu)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：40220090

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語の名詞修飾構造の類型論的性質が、どのように英語の関係詞節および同格節の習得に影響を及ぼしているかを明らかにした。日本語の名詞修飾節は、形態的および統語的にみて、関係節と同格節のような区別がほとんど存在せず、そのことによって、関係代名詞節と関係副詞節の区別や関係詞節と同格節の区別が日本語を母語とする英語学習者にとって困難になりうることを、誤用データの分析から明らかにした。

さらに、名詞修飾節の制約が緩やかではあるが日本語よりは制約のある韓国や中国語の母語話者と比べても、誤用の割合がかなり大きいことがわかった。

研究成果の概要(英文)：In this study, we have clarified how the characteristics of Japanese noun modifying clause affect acquisition of English relative clauses or appositive clauses by Japanese learners. Japanese language does not distinguish relative clauses and appositive clauses either morphologically or syntactically. We have pointed out that this causes difficulty for Japanese learners to acquire distinction between types of relative clauses or between relative clauses and appositive clauses by showing how often they actually make mistakes in these respects.

Furthermore, it has also become clear that Japanese learners make mistakes on these points more often than Korean and Chinese learners, whose languages does not have strict distinction between relatives and appositives but have some features characterizing types of noun-modifying clauses.

研究分野：対照言語学

キーワード：第二言語習得 複文構造 関係詞節 同格節 主節 従属節 言語類型論

1. 研究開始当初の背景

(1)言語類型論では、複文構造の現象に関して、どのような普遍的傾向や変異が存在するかを探求してきた。また、Croft (2001) の根源的構文文法(Radical Construction Grammar) の複文の連続性に関する分析は、認知類型論的な視点を取り入れた研究として注目されている。日本語とその他の言語との複文構造に関する対照的研究では、日本語の連体修飾節と他言語の関係詞節の特徴の対照研究が行われている。これらの研究動向が、日本語や英語の第一・第二言語習得研究に影響を与えている例(大関 2008)も見受けられる。補文節に関しては、日本語の補文節の名詞化構造と他言語の補文節との対比が行われている他、副詞節に関しては副詞節を導く接続詞の文法化のプロセスの研究 などがある。

(2)第二言語習得における複文構造の研究は、言語類型論的観察に基づいた関係詞節の習得順序の研究や、Wh-移動や繰り上げなどの規則の習得研究などが見られるものの、これらの研究は、いずれも特定の言語理論から生じた予測を検証しようとするものであり、複文構造自体がどのように習得されていくのかという視点は必ずしも明確ではなかった。

2. 研究の目的

(1)認知類型論的観点からの日英語の複文構造の特徴付け：日本語母語話者が英語を学習する際に困難を感じる人が多いとされる関係節、日英語ともに関係節との連続性が指摘されている同格節の構造と機能の相互関係が、それぞれどのような認知類型論的要因に基づいているのかを明らかにする。

(2)日本人英語学習者にとって、関係節および補文節の構造および機能のどのような点が使用上の困難を引き起こしているかを、先行研究および、本研究で構築予定の作文データベースを元に調査する。

3. 研究の方法

(1)研究代表者は、日本語を母語とする英語

学習者の学習者コーパスを用いて、学習者が産出した、関係詞節および同格節の文例を収集し、英語の名詞修飾節構造を用いる際にどのようなタイプの誤用がどの程度の頻度でおこなっているかを調査する。その調査と並行して、日本語の名詞修飾節構造が、英語の関係詞節や同格節に比べてどのような言語類型論的特徴があるのかを明らかにした。

(2)研究分担者は、認知言語類型論的な立場から、主節と従属節の連続性を、従属節内部で主節特有の特徴が見られる主節現象などに注目しながら研究し、日本語の主節・従属節の分布に関する理論的基盤を研究した。

4. 研究成果

(1) 寺村(1992)で述べられているように、日本語の名詞修飾節は「内の関係」と「外の関係」に類別されるという考え方がある一方で、日本語は、英語の同格節などで用いられるような明示的な接続機能を示す語句が名詞修飾節と被修飾名詞の間におかれることなく、名詞修飾節内の名詞句が、主節における場合と同様に省略可能であるという点から、「内の関係」、「外の関係」という区別すら存在せず、言わば一般的名詞修飾節という単一の構造を持ち、解釈に際してのフレームへの依存の度合いによってより「内の関係」的に捉えられるか、「外の関係」的に捉えられるかという違いがあるにすぎないという考え方(Matsumoto 1998, Comrie 1998, 2002)がある。

いずれの見方を取るにしても、日本語の名詞修飾節が英語の関係詞節や同格節のくらべてかなり広い意味的關係を表すことができることは明らかである。韓国語や中国語も英語よりはかなり広い意味的關係を表すことができるものの、日本語にはない動詞の形態上の区別が存在していたり、日本語では可能な意味關係が表せない場合があるといったように、日本語よりは名詞修飾節の種類に

関する限定性が存在している(松本 2014)。

(2)このような母語の性質の違いが、どのように英語名詞修飾節(関係詞節および同格節)の習得に影響を与えているのかを、英語学習者コーパスのデータ分析により調査した。

日本の中学・高校生の英作文を集めた学習者コーパス(JEFL)を調査し、関係代名詞節と関係副詞節の混同や、同格節の過剰生成について調査した(守屋 2014)。

関係詞構文の場合には、具体性が高い名詞が被修飾名詞になる場合に関係代名詞と関係副詞の混同が起こりやすい。例えば、place を被修飾名詞にした場合よりも village のような具体的な場所を表す名詞のほうが誤用が起きやすい。

同格節構文の場合には、日本語の「外の関係」を持ち込んで過剰一般化をするケースがある。ただし、に正の転移と見なせる場合も存在する。

(3)さらにアジアの英語学習者のデータを収集したコーパス(The International Corpus of Asian Learners of English, ICNALE)を用いて、日本語、韓国語、中国語母語話者の関係詞節使用に関する誤用の対照を行った。その結果、日本人英語学習者は、which を関係副詞として用いたり、同格節を導く接続詞として使用する誤用が、使用例全体の 10 パーセントに及ぶのに対し、韓国人英語学習者は 2.4 パーセント、中国人英語学習者は 1.2 パーセントと日本人学習者に比べかなり低いことがわかった(守屋 2016)。

これらの調査から、日本語の名詞修飾節の言語類型論的特徴が、英語学習の際に、影響を与えていることが明らかになった。

(4)今後の課題として、関係詞の場合、which のように日本人英語学習者の誤用の割合が他の言語を母語とする英語学習者よりかなり高いものもある一方で、それほど差がないものもあることがデータ分析で明らかにな

っているが、そのような違いをもたらす要因は何かを明らかにすること、また、いわゆる「外の関係」に関連した英語の同格節の過剰生成について、より詳しく事実観察を行い、どのような種類の「外の関係」が過剰生成されやすいのか、またそれは何故か、といった問題を掘り下げていく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

守屋 哲治、「日本語母語話者の英語複文構造の習得に関する研究：韓国語および中国語母語話者との対照」、『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』、査読無、8号、2016、25-34。

Ryu, Juyeon, Yasuhiro Shirai, and Kaoru Horie. "The L2 Acquisition of the Korean Imperfective Aspect Markers *-ko iss* and *-a-iss* by Japanese Learners: A Multiple-factor Account," *Language Learning*, 査読有、vol. 65.4, 2015, 791-823.

守屋 哲治、「日英語複文構造の対照言語学的研究：英語学習者の誤用の観点から」、『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』、査読無、6号、2014、49-59。

Ryan, Spring and Horie Kaoru. "How cognitive typology affects second language acquisition: A study of Japanese and Chinese learners of English," *Cognitive Linguistics*, 査読有、Vol. 24, 2013, 689-710.

堀江 薫、玉地 瑞穂。「第二言語習得データから見た日本語のモダリティにおける「行為拘束的モダリティ」と「認識的モダリティ」についての考察」、『言語文化論集』(名古屋大学大学院国際文化研究科)、査読無、35号、2013、

[学会発表](計 6 件)

Horie, Kaoru. “Noun-modifying Constructions in Japanese: Structural Underspecification and Pragmatic Unity,” *International Symposium on Noun-Modifying Expressions in South Asian Languages* (招待講演), 2015 年 12 月 21 日、デカン大学(インド・ブネー市)

Horie, Kaoru. “Linguistic Typology meets Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition: A Case Study from Chinese and Japanese Speakers Learning English,” 国立台湾大学言語学研究所公開講演会(招待講演) 2014 年 11 月 17 日、国立台湾大学(中華民国台北市).

堀江 薫. 「言語類型論・認知言語学の観点から見た日本語の複文現象および複文研究の動向 - 他言語との対照を通じて - 」, 2014 年輔仁大学日本語文科学科『国際シンポジウム 新旧の出会いとところ - 日本語文法の理論と実践』(招待講演) 2014 年 11 月 15 日、輔仁大学(中華民国台北市).

Horie, Kaoru. “Seeing is ‘materializing’: A cognitive typological analysis of ‘see’ in English, Japanese and Korean,” *Conceptual Structure, Discourse, and Language 2014*. 2014 年 11 月 4 日、米国カリフォルニア州サンタバーバラ市.

堀江 薫. 「言語類型論から見た日本語文法研究の可能性と挑戦課題 - 主節と従属節の相互作用を中心に - 」, 『日本言語学会第 147 回大会』(招待講演、2013 年 11 月 24 日、神戸市外国語大学(兵庫県神戸市)).

堀江 薫. Distribution of Stance-

related Functions in Japanese and Korean: Nominalisation vs. Verbal Structure. 『国際語用論学会第 13 回大会』, 2013 年 9 月 10 日、インド国ニューデリー市.

[図書](計 4 件)

堀江 薫. 「日本語の非終止形述語文末形式のタイポロジー」, 『日本語研究とその可能性』, 2015、133-167、東京：開拓社

Moriya, Tetsuharu and Kaoru Horie. “Neg-raising as a Product of Grammaticalization,” *New Directions in Grammaticalization Research*, 2015, 121-134, Amsterdam: John Benjamins.

堀江 薫. 「言語類型論・対照言語学から見た日本語複文研究の動向と課題」, 『日本語複文構文の研究』, 2014, 545-558, 東京：ひつじ書房.

堀江 薫. 「主節と従属節の相互機能拡張現象と通言語的非対称性」, 『日本語複文構文の研究』, 2014, 673-694, 東京：ひつじ書房

6. 研究組織

(1) 研究代表者

守屋 哲治 (MORIYA TETSUHARU)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：40220090

(2) 研究分担者

堀江 薫 (HORIE KAORU)

名古屋大学大学院・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：70181526